

消失点

作 吉水 恭子

舞台設定

地方警察署の取調室。
回想の中の各人の部屋。

登場人物

9人(男6 女3)

川越警察署

梶原 俊彦(48)

刑事。

しょぼくれた見た目。中年過ぎの刑事。

現場たたき上げ。過去に暴力行為による処分を受けている。

離婚協議中。まだ幼い子供を引き取るが、持て余し気味。

子育てに挫折しつつも、妻には親権を渡したくないと思っている。

田村 正宏(35)

何時までも新人扱い。でも、一応キャリア組。警察大学卒。

素直というより自分の考えを持たないように見える。他力本願。

ちょっと他の人に理解できないような独特のセンスの服装。
結婚間近の恋人がいる。が子供は持たないと宣言している。

富山 真治(50)
警察署長。

事なかれ主義に見えるが実は人情に篤い一面を持つ。
梶原刑事の良き理解者。仲人でもある。
専業主婦の奥さんがいる。

梶原 静香(35)

梶原の妻。

元交通課婦警。仕事一辺倒の梶原に愛想を尽かして、不倫。離婚を望む。それに怒った梶原からまだ幼い息子を取り上げようとする。
思い込みの激しいタイプ。

佐々木美穂
婦人警官。

被害者をめぐる人々

根本 幸(32)

被害者の母親。

川越市内のスーパーに勤める。
短大卒。そのまま結婚。生活力がない。
良妻賢母になろうと奮闘するが、破局。離婚。女兒を引き取り育てることになる。
だが、女兒の育児を放棄、密封した部屋に放置し、死なせる。

根本 公平(35)

都内商社に勤める。私立大出。マザコン。断定的で、否定的な物言い。
数年前から幸の存在を認めず、無視。モラハラのみ、離婚。母娘を捨て家を出ていく。
最低限の養育費をしぼしぼ払う。

神宮寺 良徳(48) **じんぐうじ よしのり**

自己啓発セミナーの主催者。

おそらく偽名。

幸を洗脳し、救いを与えると近づく。

小西 智美(38)

埼玉県児童相談所職員。

根本のアパートの周辺地区の担当。

両親ともに教師。教育熱心な家庭に育つ。

暴走しがちな熱血漢。こうするべき、こうあるべきということに固執がち。

しかし、幸の家の近所などからの通報があったのに、踏み込めずにいた。

子供を持ったことがないことにコンプレックスを抱える。

過去に、正義感が行き過ぎ、過干渉になり梶原とトラブルになったことがある。

上村 浩司(30)

教師。

女兒が通うはずだった小学校のクラスの担任。

入学式当日に根本の家に教科書類を届ける。

女兒が死んでしまったことに対する悔恨の念を抱えながらも、必死で何かのせいにしようとしている。

子供の頃、児童保護施設育ち。施設に引き取られながら、母を恋うる。施設ではうまく居場所を作れずにいた。

子供が施設に引き取られることが必ずしも幸せではないと考えている。

リビングに見えるけれど、分断された生活空間。
その中に白い布を被った一つの人物大の「物」。
その前に、中年の女（梶原静香）が一人。
疲れた表情で立っている。
床には菓子パンの袋、おにぎりの包装などが散らばっている。

静香 「また、こんなものばかり食べさせて…。」

「物」を横目で見ては、目を逸らす。

苛立たしげに髪を掻き上げる。

そんなことを数回繰り返し、

静香 「ねえ。」

静香 「ねえ。」

返事はない。

静香、諦めた様のため息をつく。

静香 「譲ってくれないかな。」

静香 「認めてくれないの、わかってるけど。」

静香 「ようやく来年一年生になるんだよ。まだ母親必要なんだって。食事の世話だっ
てちゃんとできてないじゃない。」

静香 「翔太、おなかすいてるんじゃないの？」

静香 「今はなんとかできても、そのうち絶対うまくいなくなる。」

静香 「私、あきらめないから。」

静香 「翔太には、私がランドセル買ってあげたいの。」

静香 「勝手なこと言ってるようだけど、私だってしようがなかったの！」

静香、出ていく。

R市Pの古びた分譲マンション、フラワー1201号室のドアの外（回想エリアA）

女がひとり、現れる。

根本幸（さち）。

「物」が動き出す。

白い布の下から現れたのは中年男。梶原。

梶原 「…よく言うよ。」

幸、扉のようなものの前に立つ。

ガムテープを取り出す。

黙々と扉たちに目張りをし出す。

梶原 「偉そうによお。」

梶原、文句を言いながら、身支度を整える。

梶原 「喰いもん、いつものところにあるから。」

支度をする梶原。

梶原 「行ってきました。」

ドアが閉まる。

その音が聞こえたかのように振り返る女。
髪を掻き上げる。

どこからか子供の声。

騒々しい足音。

田村、入ってくる。

手に資料を抱えている。

丁寧に机の上に置く。几帳面に揃える。

梶原 「ええ。」

署長、梶原の肩をポンと叩く。

署長、出ていく。

田村 「おつかれさまでーす。」

田村、署長が居なくなったのを確認して。

田村 「え、え、なんすか。」

梶原 「なんだよ。」

田村 「署長。珍しくないすか。」

梶原 「そうか？」

田村 「なんすかなんすか。内緒の話すか？」

梶原 「関係ないだろ。」

田村 「えー、水臭いじゃないすか。コミュニケーション、取りましようよー。」

梶原 「うるせえ。」

田村 「冷たいなあ。」

梶原 「外はどうだ？」

田村 「ああ。まだまだっすね。しばらく騒がれそうっす。」

梶原 「そうだな。」

田村 「でも、最近多いすね。虐待？」

梶原 「ああ。」

田村 「なんすかね。」

梶原 「さあな。」

田村 「興味ないんすか。」

梶原 「オレらの仕事はそこじゃねえだろ。」

田村 「ああ。まあ。」

梶原、田村が持ってきた資料を読み出す。

田村 「いや、でも参っちゃいますよ。ケイタ君。」
梶原 「は？」
田村 「ケイタ君すよ。朝礼で、ほら。聞いてなかったつしよ。梶さん。」
梶原 「まあ、あれだ。」
田村 「あれだ。じゃないすよ。もう。」
梶原 「で、なんだ？それ。」
田村 「オウムす。」
梶原 「おうむ？」
田村 「『ゴルデンウィーク毎年やるじゃないすか、一日署長。そのイベントと一緒にって、署で飼い始めたんすよ。オウム。マスコットにしたらしいす。』」
梶原 「へえ。」
田村 「なんか、署長が言葉教えてるみたいなん下すけどー。」
梶原 「いいんじゃないの。署長も仕事ができて。」
田村 「いいんすか？そんな言い方しちゃって。」
梶原 「だってそうだろ。いちいちクチバシ突っ込まれちゃたまねえって。」
田村 「お。うまいっすね。」
梶原 「：なんだよ。」
田村 「オウムだけにクチバシって。」
梶原 「：バカ。」
田村 「回ってくるみたいすよ、世話係。オレ、鳥アレルギーなんすよ。」
梶原 「ふーん。」
田村 「聞いてないでしょ、梶さん、オレの話。」
梶原 「聞いているよ。」
田村 「取りましようよー、コミュニケーション。」
梶原 「はいはい。」
田村 「もう。適当なんだから。」
梶原 「で。被疑者の様子は？」
田村 「落ち着いてるみたいですね。睡眠も食事も普通に摂ってます。」
梶原 「いい度胸だな。」
田村 「知ってたんですかね、子供、死んでること。」
梶原 「――ああ。」

田村、手元の資料を見る。

回想エリアAに幸が現れる。

現場マンションの共用廊下と思われる。

誰かを案内している幸。
たどり着いたドアはガムテープで頑丈に目張りしてある。
茫然とただそれを見ている幸。
ガムテープがはがされていく音。
勢いよく、ドアが開く音。

梶原 「ま。始めるか。」

田村 「連れて来ます。」

梶原 「頼む。」

田村、出ていく。

梶原、一人、部屋の中で、資料を捲る。
書類を手繰る手が止まる。

回想エリアBに静香が入ってくる。

梶原の回想。

静香 「母親、必要なんだって。」

梶原、書類を机に叩きつける。

静香が梶原をじっと見つめる。

取調室のドアを田村が開けている。

田村 「どうしたんすか、梶さん。」

梶原 「あ、いや。」

田村、入ってくる。

婦人警官佐々木が幸を連れている。

田村 「入って。」

佐々木 「どうぞ。」

幸、肯き、部屋の中に入ってくる。

梶原、幸を見つめる。

幸、毅然と梶原を見返している。

田村 「始めますよ。いいですか。」
梶原 「ああ。」

幸、梶原を見つめている。

田村 「じゃあ、そこに掛けて。」

幸、椅子に座る。

向かいの椅子に田村。取り調べを始める。

田村 「根本幸、三十二歳。間違いない？」

幸 「…はい。」

田村 「R市P4792フラワリー201。」

幸 「はい。」

田村 「昨夜はよく眠れた？」

幸 「はい。」

田村 「そうか。良かった。」

沈黙

田村 「子供、なんて名前だっけ。」

幸 「美幸。」

田村 「そう。いくつだった。」

幸 「六才です。」

田村 「一年生？」

幸 「学校、行ってなかったから。」

梶原 「行かせてなかったんだろ。」

幸、梶原を見つめる。

幸 「…体、弱くて…。」

梶原 「それをあんたは置き去りにしたんだな。」

幸、梶原を睨みつける。

梶原 「違うのかい？」
幸 「いえ。」
梶原 「違うのかって聞いてんだ。」
幸 「…(小さな声で)置き去りにしました。」
梶原 「聞こえねえよ。」
幸 「置き去りにしました。」
梶原 「…そうだよな。」
幸 「はい。」
梶原 「…邪魔になったか。」
幸 「…はい？」
梶原 「子供、美幸ちゃんだっけ。」
幸 「邪魔ってどういう意味ですか？」
梶原 「こっちが聞いてんだよ。」
幸 「…。」
梶原 「邪魔だから見捨てて、殺したんだろ。」
幸 「違います。」
梶原 「何が？」
幸 「…殺してなんていません。」
梶原 「でも、死んだ。」
幸 「…。」
梶原 「あんたが鍵かけて出た電気もガスも水道も止まった部屋で、暑くても窓も開けられなくて、で、死んだ。そうだよな？」
幸 「…。」
田村 「美幸ちゃん、極度の脱水症状だったって。」
幸 「…。」
梶原 「あんたが出ていく前に、もう随分弱ってたんだろって医者も言ってる。」
幸 「…。」
梶原 「水道も止められてたんだよな？」
幸 「…はい。」
梶原 「何が違うっていうんだ。」
幸 「…。」
梶原 「あんたが見捨てて子供が死んだ。そうだろ？」
幸 「…。」
梶原 「それとも、死んだんじゃないかって、あんたが殺したか。」
幸 「違う。」

二人、睨み合う。

幸 「私、しよがなくて…。」

梶原 「しよががなく、窓も、ドアもご丁寧にガムテープで目張りして出てったっていうのかよ！」

怯える幸。

庇うように立ち上がる田村。

田村 「梶さん。進めます。」

梶原 「頼む。」

梶原、窓の方に行く。

田村 「美幸ちゃんだっけ。」

幸 「はい。」

田村 「遺体の解剖所見だと胃が空っぽだったって。」

幸 「…。」

田村 「最後にご飯あげたの、いつ？」

幸 「…覚えてません。」

田村 「美幸ちゃん、おなかすいたって言ってなかった？」

幸 「…さあ。」

梶原 「さあ？いいかげんなこと言ってんじゃねえぞ。」

田村 「梶さん。」

幸 「…みゆと…随分話してなかったような気がします。」

田村 「そう。」

幸 「記憶がなんだか曖昧で…。」

田村 「なるほどねー。」

幸 「…。」

田村 「もう一度聞くよ。最後に食事を与えたのはいつ？」

幸 「…よく覚えてません。」

梶原 「生きてたのか？」

幸 「え？」

梶原 「あんたが部屋を出ていったとき、ちゃんと美幸ちゃんは生きてたのかって聞いているんだ。」

回想エリアAに灯が入る。
ガムテープの貼られたドアの中から
誰かの声「…ママ…。」

幸 「生きて…いたと思います…。みゆが生きてなかったら…出て行けるわけない…。」
梶原 「じゃあ、ほったらかしにして死なせることはできるんだな。」
田村 「急ぎ過ぎです。」
幸 「…みゆを取られたくなくて…。」
田村 「誰に？」
幸 「…。」
梶原 「答えろ！誰にだよ！」

田村、梶原を押さえる。

田村 「部屋を出ていったのはいつ？」
幸 「…。」
田村 「それも思い出せない？」
幸 「…桜が咲いてたような気がします。」
田村 「そう。他に思い出せることない？」
幸 「他に？」
田村 「そう。他に。」
幸 「…ランドセル。」

幸、黙り込む。

田村 「ランドセルがどうしたの？」
幸 「ランドセル、新しいのを背負った子が…お母さんと歩いてて…。」
田村 「(小声で)入学式かもしれないですね。近くの小学校当たります。」
梶原 「(小声で)頼む。」
幸 「…羨ましいなって…。」
梶原 「羨ましい？」
幸 「(無邪気な美しい笑顔で)みゆにもあんなランドセル買ってあげたいなって。」

梶原、思わず机を叩く。

田村 「梶さん。」

田村、梶原を押さえる。

田村 「今日は、このあたりにしておきましょうか。まだ初日だし、疲れちゃうから頼む。」

佐々木 「はい。さ、こちらへ。」

幸、佐々木に付き添われ出ていく。

田村 「梶さん、ヤバいつすよ。近頃煩いんすから。」

梶原 「すまん。」

田村 「頼んます。」

田村、資料を手繰る。

田村 「問題は死亡時期、ですね。」

梶原 「そうだな。」

田村 「それと殺意の有無。」

精神鑑定。請求します？」

梶原 「必要ないだろ。」

田村 「心神喪失、引つかかるんじゃないですかね。記憶も随分曖昧みたいだし。」

梶原 「うっせえんだよ。最近何でもかんでも心神喪失つてよ。そんなんでいつつも曖昧にされちまうじゃねえか。」

田村 「それはそうなんですけどね。」

梶原 「言い訳だろ、そんなの。」

田村 「突っ込み過ぎです。じゃあ、報告、上げときます。」

梶原 「田村。」

田村 「わかってますよ。余計なことは書きません。」

梶原 「…すまん。」

田村 「お疲れ様です。」

梶原 「お疲れ。」

田村、出ていく。

梶原、一人ため息をつく。

梶原、疲れた様に回想エリアBへ。

梶原の部屋。

上着を放り出し、横になり白布を被る梶原。

取調室に灯が付き、いつの間にか幸が椅子に座っている。

幸 「隋分話してなかったような気がします。」

幸 「覚えていません。」

梶原の部屋にいつの間にか静香が立っている。

幸 「いつご飯あげたのか覚えていません。」

静香 「翔太、おなかすいてるんじゃないの？」

幸 「みゆにもあんなランドセル買ってあげたいなって。」

静香 「翔太には、私がランドセル買ってあげたいの。」

幸 「みゆを取られたくなくて。」

静香 「母親、必要なんだって。」

梶原 「やめろ！」

飛び起きる梶原。

取調室の明かりは消え、幸、静香はいなくなる。

梶原、飛び起きて奥にあるらしいキッチンスペースへ。

しばらくコメをとぐ音、水音、炊飯ジャーをセットする音などが響く。

やがて梶原また横になる。